

科目名	途上国社会経済論	2 単位
担当者	秋吉 恵	
テーマ	途上国の地域社会の組織力を理解し、課題解決に向けた開発計画力を養う	
科目のねらい	<キーワード> 途上国 貧困 地域社会開発 住民組織化 <内容の要約> 本科目では、発展途上国における多様な地域社会において、住民の参加を働きかける上で不可欠な地域社会の組織力を理解することを目的とする。途上国社会を理解する上で、地域社会の組織力に着目する理由を知り、複数の事例を通して、多様な国々の地域社会における住民組織化の仕組みを見つける方法を学ぶ。 <学習目標> ・ 途上国の地域社会の組織力とは何かを理解する。 ・ 途上国の地域社会における住民組織化の仕組みを見つける方法を理解する。 ・ 各人のそれまでの現場の経験や実践事例を、相対化するための視点を持つ。	
授業の進め方	履修生は、テキストが提示された回はテキストを事前に読み込んで授業に臨み 1. テキストでわからなかった言葉や状況など素朴な疑問を出し合い、答え合う。2. テキストを読んで新たに気がついたことを出し合い、その気づきに対する気づきを話し合う。一つの章を2週間かけて学ぶ。テキストが提示されていない回は、それまでの学んだことを踏まえて、提示された「問い」について考えたことを話し合う。受講生は分担して各回のファシリテーターを担うとともに、素朴な疑問、気づき、考えを積極的に発言することが期待される。なお、第1章を扱う第2回、第3回の期間に、受講生と日程調整ができれば、第1章を踏まえてオンラインでの講義&対話を試みたい。日程調整は第1回授業期間に行う。 第1回 オリエンテーション：本科目の狙いと、教員および各受講生について共有する。 第2回 第1章 農村開発における住民組織化と地域社会 第3回 第1章を踏まえて受講生が仕事や暮らしで知る地域社会と住民組織 第4回 第2章 地域社会の集団構造と住民組織過程-タイ東北部と中部デルタ農村の比較から- 第5回 第2章を踏まえてタイの地域社会の組織力を考える 第6回 第3章 開発事業への対応にみるインドネシア村落の組織力 第7回 第3章を踏まえてインドネシアの地域社会の組織力を考える 第8回 第4章 ミャンマー農村における組織化と資源動員ーコミュニティ・フォレストリーに焦点を当ててー 第9回 第4章を踏まえてミャンマーの地域社会の組織力を考える 第10回 第7章 地域社会の見分け方 第11回 第7章を踏まえて受講生が仕事や暮らしで知る地域社会の組織力について考える 第12回 東アジアの事例から多様な地域社会の組織力へと視野を広げる 第Ⅲ部 まとめ 第13～15回 学びのふりかえり：本科目で学んだ新たな視点を持って、履修生それぞれが興味を持つ地域社会について、そこに内在する仕組みを掴むための準備<期末レポート執筆に向けた意見交換>	
事前学習の内容・学習上の注意	・ 第1回授業で受講生は各自、担当したい回を選ぶので、テキストには事前に目を通しておくことが望ましい。 ・ 各回の担当者は、ファシリテーターとして、それぞれの章及び週のテーマに応じた投げかけを投稿し、受講生間の意見交換が進むよう心掛ける。 ・ 各回で取り上げられるテキストを、事前に読み込み、その内容に対する自分の経験や知識に基づくコメントを掲示板に提示する。（この場合の経験は、必ずしも途上国に関わるものである必要はない） ・ 受講生は、自らが研究対象としている国や地域、人々を念頭において、課題や議論に参加することが望まれる。	

本科目の 関連科目	開発研究入門、地域社会システム論、地域社会開発論、開発組織・制度論
テキスト	以下のテキストを可能な限り各自で購入して利用してください。テキストを示していない回には、各履修生による調査や、それまでの授業内容を踏まえて授業を進めます。 『地域社会と開発 第3巻—住民組織化の地域メカニズム—』古今書院 (海外にいる等やむを得ない事情で購入が間に合わない、難しい場合は、担当教員にご相談ください。) 時間の関係ですべての章を取り上げられないので、授業で取り上げない章についても各自で読み進めていただければと思います
参考文献	余語トシヒロ, 重富真一共著『地域社会と開発第2巻—地域分析と行動計画の枠組み』古今書院 エステル・デュフロ(2010, 2017 邦訳)『貧困と闘う知—教育、医療、金融、ガバナンス』みすず書房 アビジット・V・バナジー, エスター・デュフロ(2011, 2012 邦訳)『貧乏人の経済学 もういちど貧困問題を根っこから考える』みすず書房 黒崎卓, 栗田匡相(2016)『ストーリーで学ぶ開発経済学—途上国の暮らしを考える』有斐閣
成績評価 方法 と基準	各受講生による各回の議論への参加度 (40 点) 各受講生がファシリテーターを担当する回での疑問点、コメントの提示を踏まえた議論の活発度、 (30 点) 期末レポート (30 点)

科目名	開発組織・制度論	2 単位
担当者	砂原 美佳	
テーマ	行政・政策論の視点から開発協力の諸問題について考える	
科目のねらい	<キーワード> ガバナンス、法と社会、EBPM <内容の要約> 本授業では、制度や組織が開発問題とどのように関わってきたかを開発協力の系譜に沿って学びます。また今日的な課題について検討する力を身につけます。 制度とは、ある種の価値を反映・実現するシステムです。現在の日本を例にすれば、民主主義という価値を反映する法制度を整え、法治行政原理に基づき議会が制定した法律に拘束される形で行政活動（組織活動）は展開されています。この意味で、制度は組織活動の土台です。国際社会に目を転じれば、別の制度（社会主義、共産主義など）を前提とする国もあります。コロナ禍を期に民主主義の限界論が脚光を浴びていますが、様々な活動の土台である「制度」の違いはどのような形で「開発」に影響を及ぼしているのでしょうか。 本授業は、15回の講義を大きく2つのパートに分けて検討します。 （1）テキスト（「開発協力のつくられ方」）を読み、開発と組織・制度の関係について歴史的・体系的に理解する。 （2）事例の検討（「法分野の国際協力活動」を紹介。受講生それぞれの問題関心に沿った事例を出し合い、検討します。） <学習目標> 本講義は、本研究科のディプロマポリシーが示す「国際社会開発領域の基礎的かつ実践的課題に取り組みながら、関連領域の基礎的知識を理解できる」および「各人のそれまでの現場の経験や実践事例を、相対化し、開発学の枠組み（理論や方法）によって体系化／総合化することができる」ことを念頭に、次の2点を目標とします。 ・開発協力をめぐる課題の背景や構造について理解する。 ・現場の経験や実践事例の短期的・長期的影響について考えることができる。	
授業の進め方	前半は、テキストを読みます。各章ごとに担当を決め、要約と論点を簡単にまとめます。具体的には初回のオリエンテーションで説明します。後半は事例の検討・ディスカッションを行います。 以下では、第2回から第10回まで「テキストを読む」予定にしていますが、全ての章を扱うとは限りません。網羅的に扱うことよりも、受講者一人一人の関心に寄せて、テーマを深く掘り下げることを主眼としたいと考えています。後半は、事例を検討します。 第1回 はじめに（オリエンテーション） 第2回 テキストを読む（第1章「自立の夜明け」経済協力体制の形成） 第3回 テキストを読む（第2章「開発の東南アジア」援助受入体制の構築） 第4回 テキストを読む（第3章「逆風の現場」） 第5回 テキストを読む（第4章「後発援助国への圧力」援助大国への道） 第6回 テキストを読む（第5章「権威主義体制の援助吸収」） 第7回 テキストを読む（第6章「続出する ODA 批判」） 第8回 テキストを読む（第7章「開発協力と「人間」の発見」） 第9回 テキストを読む（第8章「塗りかわる援助地図」） 第10回 テキストを読む（第9章「問題案件のその後」） 第11回 事例の検討 第12回 事例の検討 第13回 事例の検討 第14回 事例の検討 第15回 まとめ	

事前学習の内容・ 学習上の注意	オンラインでの顔合わせを行う予定です。(4月) テキストを入手し、授業に先立って目を通してください。
本科目の 関連科目	
テキスト	佐藤仁『開発協力のつくられ方―自立と依存の生態史』東京大学出版会, 2021 年. (シリーズ「日本の開発協力史を問いなおす」7)
参考文献	適宜指示します。
成績評価方法 と基準	最低限の回数の発表と議論への参加を前提に、事前学習・受講態度(40%)、期末レポート(60%)を総合的に勘案して評価します。

科目名	地域社会システム論	2 単位
担当者	斎藤 千宏	
テーマ	アフリカの地域社会組織を理解し開発支援実践に活かそう。	
科目のねらい	<キーワード>地域社会システム アフリカの「地域社会」 参加型開発 公共圏 <内容の要約> 経済自由化や民主化が歴史的にも文化的にも異なる背景をもつアフリカ各国に導入されてきた。その過程において異なる政治経済構造の下、農村地域社会はどのように対応したか、またどう対抗してきたのかを、「公共圏」の議論を踏まえながら検討し学ぶ。 <学習目標> アフリカの地域社会を開発事業と関連付けて理解できる。 社会科学的方法論に基づきフィールドワークを設計・実施できる。 アフリカ以外の地域での開発支援活動でも応用がきくようになる。	
授業の進め方	第1回～第5回 パート1 アフリカの地域社会を中心に討論。 第6回～第9回 パート2 市場化の影響と地域開発組織を中心に討論。 第10回～第14回 パート3 政治と地域開発組織を中心に討論。 第15回 まとめ	
事前学習の内容・学習上の注意	国内であれ国外であれ地域社会とかかわって仕事をしたことがある人は、自身の経験を整理しておくこと。テキストの舞台がアフリカなので、アフリカで活動いたことがある履修生討論をリードしてくれることを望みます。	
本科目の関連科目	コミュニティ開発、地域社会開発論など	
テキスト	『現代アフリカ農村と公共圏』児玉由佳編、アジア経済研究所、2009 年	
参考文献	『福祉社会開発学の構築』とくに第8章（余語トシヒロ著）、日本福祉大学 COE 推進委員会編、ミネルヴァ書房、2005 年	
成績評価方法と基準	ディスカッションへの参加度（40%）、提出レポート（60%）をもとに評価を行い、全体で60ポイント以上を獲得した者は合格とする。	

科目名	開発経済論	2 単位
担当者	池見 真由	
テーマ	途上国の人びとの暮らしから考える開発と経済と貧困	
科目のねらい	<キーワード> 開発経済学、貧困、途上国、国際協力、住民参加型開発 <内容の要約> 指定テキストを基に講義を進めながら、現場でのケーススタディも積極的に取り入れ、受講生と教員あるいは受講生同士の自由かつ活発な議論、情報共有、意見交換を行う授業を展開します。 <学習目標> 経済学の理論と実践を、途上国における貧困や開発の問題に適用することができ、現地の人びとの目線や立場に寄り添いながら、様々な事例を通じて包括的に学び、理解を深め、多角的な視野を広げることを目標とします。	
授業の進め方	第1回 ガイダンス、自己紹介、授業計画 第2回 開発経済論とは、テキスト概要説明、途上国の現状 第3回 農業：伝統的制度に秘められた知恵 第4回 農村信用市場：多様化する農村経済とマイクロファイナンス 第5回 教育と健康：人づくりは国づくり 第6回 労働移動：バラ色の新天地？ 第7回 経済成長と工業化：グローバル化した世界 第8回 技術移転：学びの道も一歩から 第9回 開発金融：おらが村とグローバル金融システムのつながり 第10回 開発援助：がんばれニッポン 第11回 持続可能な開発：環境と開発の対立を超えて 第12回 途上国の希望 第13回 現場へ行こう1：フィールド調査の実態 第14回 現場へ行こう2：介入の効果を測る 第15回 期末レポート、まとめ	
事前学習の内容・学習上の注意	事前学習としては、授業毎にテキストの該当章を読み、予習をしてもらいます。受講生同士で役割分担を決めて、担当に当たった章の内容要約、意見・考察、追加で調べたことなどをまとめて発表してもらいます。復習に関しては、授業中に指示される内容の他、関連する文献やWebサイトなどを自主的に調べて情報収集することをお勧めします。また、国際情勢（経済・政治・社会・環境・紛争）などに関するニュースを毎日チェックしましょう。基本的には、毎回の授業に集中して積極的に参加してもらい、そこで新たな知見や学び、更なる興味関心を引き出してもらうことが第一と考えています。	
本科目の関連科目		
テキスト	黒崎卓・栗田匡相（2016）『ストーリーで学ぶ開発経済学』有斐閣ストゥディア	
参考文献	戸堂康之（2021）『開発経済学入門 第2版』新世社 ジェトロ/アジア経済研究所・高橋和志・黒岩郁雄・山形辰史（2015）『テキストブック開発経済学 第3版』有斐閣ブックス	
成績評価方法と基準	授業への参加状況：60% 発表内容/期末レポート：40% 以上の割合で評価を行い、総合点 60%以上を合格とします。	

科目名	開発のミクロ経済学	2 単位
担当者	岡本 真理子	
テーマ	発展途上国の諸事象をミクロ経済学で読み解き、問題解決策に活かす	
科目のねらい	<キーワード> ミクロ経済学、貧困世帯の家計、個人の効用と選択、問題解決、インセンティブ <内容の要約> 資金や人材の制約が多い発展途上国で、特定の開発プロジェクトや共通の目標に向けて人々を組織し、良い行動を促すインセンティブをどのように制度に内蔵するかということは、開発関係者によってかなり重視されるようになってきた。この制度設計において、発生した問題をミクロ経済学的視点から分析することが役立つ。この科目では、当該事象の担い手が、ある条件下でそれなりの主観的合理性をもって選択し行動した結果であるとの前提にたち、それらの事象をミクロ経済学的に見ればどのような解釈が可能かを検討し、分析の枠組みを身につける。 <学習目標> ・ミクロ経済学の基本を理解する。 ・途上国の諸問題の背後にある要因や発生のメカニズムを理解する。 ・現地の問題解決において、適切な選択肢を考えることができる。	
授業の進め方	第3回以後は、途上国でよく観察される仮想のトピックスを基にした「お題」を投げかける。それに対して、院生が、お題に関連すると思われる事例を自分の経験や文献、から探し、先行研究あるいは院生からの仮説を、ミクロ経済学的に検討していく。受講生の関心事次第で、下記のテーマをすべてではなく選択して2週にわたって議論をする場合もある。また、受講生が可能なら、オンライン授業の時間を設ける。 第1回 導入とウォーミングアップ問題（効用関数と無差別曲線の基本について） 第2回 ウォーミングアップ問題の回答と解説 第3回 貧しい途上国の街角でなぜ昼間から何もしない人達がいるのか？ 第4回 「融資の利子率 30%」は高いのか？ 第5回 分益小作は非効率か？なぜ根強く存在するのか？ 第6回 オンライン補講 第7回 貧困層が依存しない生活保護策は可能か？ 第8回 途上国農村の学校教員欠勤・怠慢問題はどうしたら打開できるか？ 第9回 児童労働は「禁止」すればなくなるのか？ 第10回 「共有地の悲劇」はなぜ発生し、その打開策は何か？ 第11回 途上国の汚職・賄賂問題はなぜ放置すべきではないのか？その打開策は？ 第12回 国際援助団体の撤退とともに事業が継続しないケースがあるのはなぜか？ 第13回 院生による問題持ち込みと検討1 第14回 院生による問題持ち込みと検討2 第15回 各自がこの科目を通して学んだことの発表	
事前学習の内容・学習上の注意	テーマの意図や手掛かりが解らないときは尋ねてください。これは経済学のことでないかも知、と迷うような場合も、どんどん挙げてもらって結構です。すべての道ではないですが、多くの場合はミクロ経済学に通ず。	
本科目の関連科目	マイクロファイナンス論、開発組織・制度論	
テキスト	適宜、関連文献を配布する。	
参考文献	黒崎卓・山形辰史著『開発経済学』2017年 日本評論社（増補改訂版）、 エステル・デュフロ『貧困と戦う知』2017 みすず書房 清水克俊・堀内昭義『インセンティブの経済学』2003 有斐閣 ダン・アリエリー『嘘とごまかしの行動経済学』2012 早川書房	
成績評価方法と基準	担当箇所の報告（50%）、質問や討議への参加（50%）	

*過年度（2018 年度まで）に「参加型開発論」で単位取得をした場合は、「コミュニティ開発」を履修することはできません。

科目名	コミュニティ開発	2 単位
担当者	野田 直人	
テーマ	外部者が計画を立てて主導する開発アプローチは、不確かな仮説が入りやすく機能しない場合が多い。外部者は、当事者が主体となる参加型開発をサポートする役割を担うべきである。	
科目のねらい	<キーワード> 参加型開発、内発的開発、住民主体、仮説のマネジメント <内容の要約> 参加型開発は言葉やイメージが先行し、手法やツールを駆使して住民の参加を促すことだと思われがちだが、そうではない。住民にとっては生活そのものが開発のプロセスでありそこに外部者がどうかかわり、交わりを持つか、その時に外部者がどのように考え、どのような態度をとるかが参加型開発でもっとも重要な点である。参加型開発の意味を理解するために、まず発展途上国におけるコミュニティの状況について理解する。開発協力の流れの中から、どのようにして参加型開発の概念が生まれてきたかを学ぶ。さらに住民の主体的参加とは何であるかを考え、その障害となる「専門家（受講生）の思い込み」に焦点を当て、パラダイムシフトの実現を試みる。また、コミュニティにおいて参加型開発を実践する際に必要となる、実践的な社会経済学的な基礎知識を身につける。その結果、自らの業務で対象地域となる社会に関する分析や、プロジェクトの方法論の分析ができるようになることを目指す。 <学習目標> 開発協力の前提となる発展途上国のコミュニティの特質を理解する。 参加型開発の意味と外部者の役割を理解する。 計画に伴う仮説の分析ができる。 コミュニティ開発における基礎的な社会・経済的な分析ができる。	
授業の進め方	第1回 地域コミュニティとは 第2回 地域コミュニティ開発で優先すべきこと 第3回 参加型開発とは 第4回 参加型開発における外部者の役割 第5回 仮説分析の説明 第6回、7回、8回 仮説分析の演習 第9回 仮説と参加型 第10回 仮説分析の演習 第11回 仮説を避けるためのアプローチ 第12回 参加型開発のアプローチ 第13回 地域コミュニティ開発の社会経済学 第14回 PRRIE モデル 第15回 質疑応答と課題の解説	
事前学習の内容・学習上の注意	講義開始時に指定のテキストを通読すること。 参考文献の内どれか少なくとも一冊を読むことが望ましい。	
本科目の関連科目		
テキスト	『地域コミュニティ開発 参加型開発・コミュニティの社会経済』（国際協力の教科書シリーズ5）	

*過年度（2018 年度まで）に「参加型開発論」で単位取得をした場合は、「コミュニティ開発」を履修することはできません。

参考文献	1.『参加型開発と国際協力：変わるのはわたしたち』ロバート・チェンバース著、明石書店、2000年 2.『開発フィールドワーカー改訂版』野田直人著、有限会社人の森、2016年 3.『機会均等の研修実施によるコミュニティ開発 PRRIE アプローチの基礎と実践』野田直人著、有限会社人の森、2017年
成績評価方法と基準	レポートのみで評価する。100点満点で60点以上を合格とする。講義の内容を正しく理解できていれば60点とし、自らの知見が加えられていたり、実際の案件の分析が正しく行われていたりすればその分を評価して加点する。 レポートでは自らの経験や関係する実例を題材にすることが推奨されるが、該当する案件がない場合、適当な文献を選び、その分析を行うこととする。

科目名	開発評価論	2 単位
担当者	吉村 輝彦	
テーマ	「評価」の考え方を改めて見つめ直し、同時に、「評価」を多面的に理解し、評価の視点から自身の取り組みのあり方を構想する。	
科目のねらい	<キーワード> 評価、参加、アウトカム、プロセス、マネジメント <内容の要約> ・近年、政策、計画や事業・プロジェクトのマネジメント（進行管理も含めて）は、広く行われている。政策、計画や事業の実施過程を、定期的にモニタリングし、どれだけ個別施策や事業が実施され、どの程度計画目標や成果目標が達成されたのかということ、計画→実施→評価→改善という PDCA サイクルにおいて、継続的に「評価」していくことにより、効果的な実施と運用に取り組んでいこうとしている。実際には、「評価」は、幅広い領域で、その必要性和意義が認識され、様々な「評価」（「形成的評価」や「総括的評価」等）が行われている。 ・この「評価」に関しては、誰が、何のために、どのような射程を持って、どのような観点／視点から評価を行うのか、実際にどこまでのことが評価することができるのか等様々な論点がある。そして、参加型評価、協働評価、エンパワメント評価、発展的評価等、多様な評価のアプローチのありようが議論されている。さらには、VUCA の時代を見据えると、PDCA と対比される OODA ループ等の考え方も理解しておく必要がある。他方で、「評価疲れ」という言葉が出てきている等、改めて評価自体のあり方を確認していく必要がある。 ・本科目では、「評価」の考え方を改めて見つめ直し、同時に、「評価」を多面的に理解し、評価の視点から自身の取り組みのあり方を構想する。 <学習目標> ・「評価」に関わる基本的な事項や現状を理解できる。 ・「評価」を多面的に理解し、どのように評価を活かしていけるのかを構想することができる。 ・「評価」の視点から履修者自身の視点や取り組みを相対化し、それぞれが直面している状況を深化させる機会にしていけることができる。	
授業の進め方	■第1回 ガイダンス（WEB 掲示板での議論） ■第2回～第3回 評価の定義やその意義をめぐる議論（WEB 掲示板での議論） #履修者が、自らの経験等を踏まえて、評価の定義や意義について発題し、その内容を共有するとともに、議論する。 ■第4回～第11回 配布資料や参考文献に基づく発表と議論（WEB 掲示板での議論） #配布資料やいくつかの参考文献を踏まえて、履修者が分担して話題提供を行い、それをもとに、評価の理論的及び実務的観点から評価のあり方を議論する。 #ここでは、参加型評価、協働評価、エンパワメント評価、社会的インパクト評価、発展的評価等、多様な評価のアプローチを理解していく。 ■第12回～第14回 参考文献や具体的な事例の評価文書に基づく発表と議論 #参考文献、あるいは、JICA等の事業やプロジェクトに関わる具体的な事例の評価文書をもとに、履修者が分担して話題提供を行い、評価の実践事例等を踏まえ、そこでの評価の考え方に焦点をあてて議論を進める。 ■第15回 これまでの振り返り（WEB 掲示板での議論）	
事前学習の内容・学習上の注意	・関心がある参考文献を事前に読んでおくこと。 ・関心がある分野の評価の取り組みに関して、JICA等のプロジェクトでは、実際にどのように行われているのか、その内容について事前に確認しておくこと。 ・日頃から「評価」に関わるトピックスを意識しておくこと。	
本科目の関連科目		

テキスト	テキストは使わず、授業の進捗に合わせて、資料を提示する。 また、適宜、参考文献を参照する。
参考文献	・米原あき・佐藤真久・長尾眞文編著（2022.4）「SDGs 時代の評価：価値を引き出し、変容を促す営み」筑波書房（2,500 円+税） https://www.hanmoto.com/bd/isbn/9784811906256 ・ジェリー・Z・ミューラー著、松本裕訳（2019.4）「測りすぎ—なぜパフォーマンス評価は失敗するのか？」みすず書房（3,000 円+税） https://www.msz.co.jp/book/detail/08793/ ・源由理子編著（2016.11）「参加型評価」晃洋書房（2,700 円+税） http://www.koyoshobo.co.jp/book/b311259.html ・三好皓一編（2008.1）「評価論を学ぶ人のために」世界思想社（2,000 円+税）＜絶版＞ https://sekaishisosha.jp/book/b354089.html ・山谷清志監修、源由理子・大島巖編著（2020.12）「プログラム評価ハンドブック」晃洋書房（2,600 円+税） http://www.koyoshobo.co.jp/book/b535755.html ・安田節之（2011.5）「プログラム評価—対人・コミュニティ援助の質を高めるために」新曜社（2,400 円+税） https://www.shin-yo-sha.co.jp/book/b455770.html ・安田節之・渡辺直登（2008.7）「プログラム評価研究の方法」新曜社（2,800 円+税） https://www.shin-yo-sha.co.jp/book/b455884.html ・文化庁×九州大学 共同研究チーム編（2021.7）「文化事業の評価ハンドブック—新たな価値を社会にひらく」水曜社（2,500 円+税） http://suiyosha.hondana.jp/book/b584824.html ・文化庁×九州大学 共同研究チーム編（2021.3）「やってみよう！評価でひらく“社会包摂×文化芸術”ハンドブック」 http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/publication/sal_handbook_2020/ ・文化庁×九州大学 共同研究チーム編（2020.3）「評価からみる“社会包摂×文化芸術”ハンドブック」 http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/publication/sal_handbook_2019/ https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/pdf/92212901_03.pdf ・熊倉純子監修・編著、槇原彩編著（2020.3）「アートプロジェクトのピアレビュー：対話と支え合いの評価手法」水曜社（1,600 円+税） http://suiyosha.hondana.jp/book/b498016.html ・日本政策投資銀行編（2020.1）「アートの創造性が地域をひらく」ダイヤモンド社（2,000 円+税） https://www.diamond.co.jp/book/9784478084717.html ・ウェストリー他（2008.8）「誰が世界を変えるのか」英知出版（1,900 円+税） ・池田葉月（2021.3）「自治体評価における実用重視評価の可能性」晃洋書房（2,800 円+税） http://www.koyoshobo.co.jp/book/b559436.html ・塚本一郎・関正雄（2020.7）「インパクト評価と社会イノベーション」第一法規（2,900 円+税） ・藤島薫（2014.3）「福祉実践プログラムにおける参加型評価の理論と実践」みらい（2,800 円+税） ・大島巖・源由理子他編（2019.9）「実践家参画型エンパワメント評価の理論と方法」日本評論社（2,800 円+税） ・フェッターマン、ワンダーズマン編著、笹尾敏明監訳（2014.1）「エンパワーメント評価の原則と実践」風間書房（3,500 円+税） ・キャロル・H・ワイス、佐々木亮監修（2014.3）「入門 評価学」日本評論社（6,000 円+税）

	・ NPO 法人アークス編（2003.9）「国際協力プロジェクト評価」国際開発ジャーナル社（1,500 円+税）＜絶版＞ ＜参考ウェブサイト＞ ・ 日本評価学会： # 学会誌『日本評価研究』にアクセスが可能。 http://evaluationjp.org ・ JICA 事業評価： # 「途上国開発と事業評価」「JICA 事業評価ガイドライン（第 2 版）」「JICA 事業評価ハンドブック（Ver.2.0）」「別冊【2022】外部事後評価レファレンス」のダウンロードが可能、また、事業評価案件の検索が可能。 https://www.jica.go.jp/activities/evaluation/index.html ・ 外務省「ODA 評価」： # 「DAC 評価基準」「評価実施案件・評価報告書」にアクセスが可能。 https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/kaikaku/hyoka.html ・ 国土交通省「都市再生整備計画事業評価の手引き」 http://www.mlit.go.jp/toshi/crd_machi_tk_000036.html ・ Blue Marble Japan： # 「Developmental Evaluation（発展的評価）の引き出し集」にアクセスが可能。 https://www.blue-marble.co.jp ・ SIMI 社会的インパクト・マネジメント・イニシアチブ： # リソース（ロジックモデルやツールセット他）にアクセスが可能。 https://simi.or.jp ・ CSO ネットワーク https://www.csonj.org ・ Social Value Japan http://socialvaluejp.org
成績評価方法と基準	原則として、担当者あるいは指定討論者としての参加（30%）、議論への参加度合い（30%）、そして、最終レポート（40%）を踏まえた評価を行い、全体で 60%以上を合格とする。

科目名	地域社会開発論	2 単位
担当者	平野隆之	
テーマ	地域共生社会を目指す開発の方法	
科目のねらい	<キーワード> 地域共生、開発福祉、まちづくり、地域福祉 <内容の要約> テキストを購読しながら、地域共生社会の開発を目指すための方法を実践事例のなかから修得することを目指す。テキストにおける事例は、地域における実践の観察によりまとめられたものにとどまらず、実践に研究者が関与するなかで得られた内容を含んでいる。その意味では、学習者はそのような視点で、実践事例を理解しつつ、自身の実践の客観的な分析にも役立たせることを目指す。 <学習目標> 地域共生社会を目指す開発方法にどのような特徴をもつかを理解する。 地域課題や特性の違いを踏まえ、開発方法の適切な選択ができる。 地域社会開発に関する自身の実践の振り返りに役立たせ、事例研究が進めることができる。	
授業の進め方	○福祉の知識が多く求められるので、その点での解説を事前に行うように配慮する。投稿の内容において、自身の実践との比較・相対化についての報告が多く含まれることが期待される。 ○地域共生の開発福祉の全体的な考え方や事例の配置について理解する。 第1回～第3回 「はじめに」と第1章 開発福祉という新たな概念の理解を踏まえて、本書の特徴や学ぶ方を整理する。日本における地域社会の開発(福祉)に関しての多様なアプローチについて、基本的な内容を理解する。オンラインでの理解の確認とテキスト活用する方法に関する意見交換を行う。 第4回～第5回 第2章 開発研究の視点から開発福祉を理解する。 ○個別の事例分析 第6回～第8回 第3～6章および第14章 集落福祉の挑戦のそれぞれの取り組みにみる生産と福祉の融合のための方法を比較検討する。各自の関心に応じて、論文を選択する。また、各章の事例の分析方法について比較検討する。地域共生の開発を政策から理解する。 第9回～第11回 第7～9章 都市部における福祉とまちづくりの融合の比較検討を行う。 また、韓国と日本の事例における福祉とまちづくりの比較検討を行う。 第12回～第14回 参考文献に関連するトピックを取り上げ、今日日本の中で求められている地域社会開発に関するオンラインでの講義と演習を行う。 ○全体のまとめ 第15回	
事前学習の内容・学習上の注意	授業開始までに指定テキストを入手し、各自の興味を踏まえて担当を希望する章を検討しておくこと。テキストは入手に時間がかかる（在外からは特に）ため、受講予定者は、早目に手配しておくことが望ましい。	
本科目の関連科目	福祉社会開発演習	
テキスト	日本福祉大学アジア福祉社会開発研究センター編『地域共生の開発福祉—制度アプローチを越えて』（ミネルヴァ書房）	
参考文献	平野隆之(2020)『地域福祉マネジメント-地域福祉と包括的支援体制』（有斐閣） 平野隆之（2023）『重層的支援の体制整備と評価活動：地域福祉マネジメントの展開（仮題）』（有斐閣）9月に出版予定	

成績評価方法 と基準	文献の講読による発表、議論への参加度（60％）、レポート（40％）の方法で行い、全体で 60％以上を合格とする。ただし掲示板での投稿、議論に十分に参加されていることを、期末レポート提出の要件とする。
---------------	---

科目名	環境計画論	2 単位
担当者	千頭 聡	
テーマ	主として環境の側面から、持続可能な開発と社会のあり方を考えよう。	
科目のねらい	<キーワード> 持続可能な開発(SD)、持続可能な開発のための目標(SDGs)、持続可能な開発のための教育(ESD)、環境共生、環境計画 <内容の要約> 2015 年の国連持続可能な開発サミットにおいて持続可能な開発のためのアジェンダ(SDGs)が制定され、包摂型社会、経済発展、環境保全の 3 つの側面を踏まえた 17 の目標、169 のターゲットが設定され、先進国、発展途上国ともに様々な取り組みが進められています。本講義では、これらの動きを整理してその意味を考えるとともに、環境に軸足を置きつつ、人間社会との関係性の中で環境をどうとらえ、環境資源をどう公正に利活用していくべきなのかについて、根源的な概念を解きほぐした文献および近年の動向をもとに、皆さんと議論していきたいと思います。また、ESD の考え方と実践方法についてもテキストに基づいて議論したいと思います。 <学習目標> 持続可能な開発と SDGs および ESD、環境資源の管理と利用に関する理念的な枠組みが理解できるとともに、環境に対する基本的な考え方を獲得することができる。	
授業の進め方	テキストのいくつかの章について、受講生で分担しながら、内容の紹介、議論すべきポイントの提起と受講生による議論により、環境計画という概念の共通理解を図ります。合わせて、院生自身の問題認識に基づき議論を深めていきます 第 1 回 ガイダンス 第 2 回から第 4 回 環境に関わる国際的な動向、MDGs から SDGs へのまとめ 第 3 回から第 8 回 SDGs の目標に関わる議論 第 9 回から第 12 回 環境計画の概念と実際 第 13 回から第 14 回 ESD の理念と手法、進め方についての議論 第 15 回 まとめ なお、受講生の人数や関心領域に応じて、適宜、学習内容の変更やテキストの追加・変更を行います。	
事前学習の内容・学習上の注意	○テキストの担当章については、事前に精読のうえ、内容の要約、議論のポイントなどを他の受講生に示し、議論を誘発するように取り組むこと。 ○担当以外についても、あらかじめ一読し、自らの考え方をまとめておくこと。	
本科目の関連科目	特に指定せず	
テキスト	○名古屋市(2015)「ESD はじめての一步」 (PDF ファイルを配布予定) ○末石富太郎+環境計画研究会(1993)「環境計画論」森北出版 (必要ヶ所の PDF 化と配布を行う予定) ○その他、適宜関連資料を配布予定	
参考文献	今後、随時、情報提供していきますが、たとえば以下のような書籍があります。 ○小宮山宏編 (2008)「サステイナビリティ学への挑戦」岩波書店 (2,900 円) ○松下和夫編著 (2007)「環境ガバナンス論」京都大学学術出版会 (4,200 円) ○井上真・宮内泰介編 (2001)「コモンズの社会学」新曜社 (2,400 円) ○三村信男他編 (2008)「サステイナビリティ学をつくる」新曜社 (2,900 円)	
成績評価方法と基準	原則として、担当者としての参加 (40%)、議論への参加(30%)、最終レポート(30%)として、総合計で 60%以上を合格とする。	